

| | |
|--------------|---|
| Title | 無化する詩人：『ミルトン』におけるブレイクの自己回復 |
| Author(s) | 渡部, 充 |
| Citation | Osaka Literary Review. 27 P.61-P.72 |
| Issue Date | 1988-12-20 |
| Text Version | publisher |
| URL | https://doi.org/10.18910/25511 |
| DOI | 10.18910/25511 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

無化する詩人

——『ミルトン』におけるブレイクの自己回復——

渡 部 充

William Blake は長年住み慣れた London を離れ、1800年から三年間 Felpham の村で、彼のパトロンを任じていた詩人 William Hayley のもと挿絵描きの仕事に甘んじていた。この時期の詩人は、来るべき新しい時代にかけての期待は裏切られ、預言者としてのその声には耳を貸すものもなく、野心的な大作『四つのゾア』には満足のいく形が与えられず、ヘイリーとは意見が合わず、大いに屈辱感を味わっていた。さらに些細な事件から国逆罪に問われ、裁判を受けるという有様であった。しかし、彼がフェルパムを去るにあたって友人に宛てた手紙はこの三年間が不毛のものではなかったことを証している。

But none can know the Spiritual Acts of my three years Slumber on the banks of the Ocean unless he has seen them in the Spirit or unless he should read My long Poem descriptive of those Acts for I have in these three years composed an immense number of verses on One Grand Theme Similar to Homers Iliad or Miltons Paradise Lost the Persons & Machinery intirely new to the Inhabitants of Earth (some of the Persons Excepted) I have written this Poem from immediate Dictation twelve or sometimes twenty or thirty lines at a time without Premeditation & even against my Will, the Time it has taken in writing was thus renderd Non Existent. & an immense Poem Exists which seems to be the Labnur of a long Life all producud without Labour or Study. I mention this to shew you what I think the Grand Reason of my being brought down here.

(Letter to Thomas Butts, April 25, 1803)¹⁾

ここには大詩人ホーマーやミルトンに匹敵する叙事詩をものしようという

ブレイクの意気込みが見られるが、この叙事詩こそその先輩詩人の名を冠した *Milton* (1804-c. 1808) であり、それは詩人がロンドンに帰って後に完成され、全二巻50枚のプレートに彫版された。

『ミルトン』は詩人ミルトンが天から降りてきてブレイクと一体となり、さらには想像力の体現者であるロスと三者が一体となって、自己を否定することで内なる Satan を克服し、ミルトンは失っていたその女性的分身 Ololon を取り戻し天に帰り、一方、地上のブレイクは先輩詩人の力を得て再び統一のとれたヴィジョンを回復して書き上げるのが他ならないこの『ミルトン』であるという一種の循環的なメタポエトリになっている。ここには『天国と地獄の結婚』に見られたのと同様の、本来透明であるべき神のヴィジョンを歴史のなかに生きる人間が、言葉という不透明な媒体によって汚しつつ語らねばならないというグノーシスの矛盾が提示されている。²⁾ これはちょうどミルトン、ブレイク、ロスの三位一体のごとく、叙事詩についての叙事詩、神話についての神話、詩作についての詩作がひとつになったものであるといえよう。

自らの想像力=詩的ヴィジョンに対する最大の脅威であった同時代の自然宗教に対抗してブレイクはその神話世界を幾つかの小子言書と呼ばれる作品群に展開させていった。全てを包括的に語ろうとするその神話世界は必然的にその敵たる自然宗教を取り込み、ついに『四つのゾア』第八夜では、18世紀の自然宗教の勝利する暗黒世界を描くことになり、その結果、続く第九夜はいわゆる「機械仕掛けのアポカリプス」となる。³⁾ 取り込み利用するはずの現実の歴史の世界が、逆にその神話世界を規定することとなり、その想像力を脅かす。分裂、拡散から統合、收拾へと回帰する物語を語らねばならない神話それ自体が分裂、拡散しはじめ、神話世界の生み手たる詩人がその体現者ロス（喪失 Loss でもある）よろしく「自らの見るものとなった」⁴⁾ 訳である。『ミルトン』は詩人の直面していたこのような想像力の危機に対して詩の新しい可能性を開き、新たな声を獲得しようとした試みであった。この小論ではブレイクのこの試みがいかなるもので

あったのか考察していきたい。

1

『ミルトン』は二つの部分、詩中の詩たる *Bard's Song* とそれを聞いたミルトンが自らの過ちを悟って、それを正すため地上に降りてブレイクと一体となるという主筋よりなる。詩中の詩が連鎖反応的にミルトン、オロロンの行為を引き起こし、最後にブレイクがその詩自体を書き上げるといふ循環構成になっており、これは冒頭の「新しい時の人よめざめよ」(1: preface)との呼び掛けが来るべき時代のミルトンたちに通じるよう願う詩人の仕掛けでもあろう。

「三つの種属がロスのハンマーによって創られる」(2:26)と始まる *Bard's Song* は『ミルトン』における創造 *Creation* = 墮落 *Fall* 神話であるが、初期予言書以来のそれとはかなり趣を異にし、三つの種属 'the Elect' 'the Redeemed' 'the Reprobate' にそれぞれ属する粉ひき *Satan*, 耕作者 *Palamabron*, 預言者 *Rintrah* らの争いの物語として展開する。セイタンは 'Newton's Pantocrator' (4:11) と呼ばれ、ニュートンの宇宙 'the dark Satanic Mills' (1:8) の粉ひきとして創造を挽きつぶして物理的世界を形成し、いっぽう、パラマブロンは 'the harrow of the Almighty' (4:1) によって真の存在を耕作する。彼の馬鍬の通ったあとの耕作地のみぞは詩の一行一行を、あるいはブレイクの彫りあげる線の一本一本を現し、その生み出す作物とは言葉のヴィジョンに他ならない。

混乱は理性の化身たるセイタンが、パラマブロンと役割を交換し、彼の馬鍬を用いる(詩作を司る)ことから始まり、やがてセイタンは七つの大罪を生み出し、神の集会の場で自分こそが神であると宣言すると不透明の極限となり、胸には物理世界 *Ulro* が開かれる。

He created Seven deadly Sins drawing out his infernal scroll,
Of Moral laws and cruel punishments upon the clouds of Jehovah
To pervert the Divine voice in its entrance to the earth

With thunder of war & trumpets sound, with armies of disease
 Punishments & deaths musterd & number'd ; Saying I am God alone
 There is no other ! let all obey my principles of moral individuality
 I have brought them from the uppermost innermost recesses
 Of my Eternal Mind, transgressors I will rend off for ever,
 As now I rend this accursed Family from my covering.
 Thus Satan rag'd amidst the Assembly ! and his bosom grew
 Opaque against the Divine Vision : the paved terraces of
 His bosom inwards shone with fires, but the stones becoming opaque!
 Hid him from sight, in an extreme blackness and darkness,
 And there a World of deeper Ulro was open'd, in the midst
 Of the Assembly, In Satans bosom a vast unfathomable Abyss.

(9 : 21-35)

こうして透明な神のヴィジョンに対して、不透明な人間存在のひとつの極限となったセイタンは理性と法でこの宇宙を司る存在 *Urizen* となる。このパラマブロンとセイタンの物語には、ブレイクの創造に干渉して止まなかった似非詩人ヘイリーと不本意ながらその下で働き続けたブレイクの関係が読み取れようが、⁵⁾さらにはセイタンとは本来透明な神のヴィジョンを言葉によって不透明にしなければならない全ての詩人の持つ理性的部分であり、影の部分であるといえよう。

そうであればこそ、この *Bard's Song* を聞いたミルトンは非を悟って、自身の内なるセイタン＝詩人の理性的部分を克服すべく再び地上の生、「永遠の死」の世界に降りたつ決心をする。

I will go down to self annihilation and eternal death,
 Lest the Last Judgment come & find me unannihilate

.....

I in my Selfhood am that Satan : I am that Evil One !
 He is my Spectre ! in my obedience to loose him from my Hells
 To claim the Hells, my Furnaces, I go to Eternal Death.

(14 : 22-23, 30-32)

ここに『ミルトン』本来の物語が展開する、自ら Bard's Song 中の「あのセイタン」、同時に *Paradise Lost* で自ら描いた「あのセイタン」であると認めたミルトンは『失樂園』中のセイタンの地獄への下降になぞらえて地上へと下降する。地上のブレイクはミルトンが流星となって、左足に落ちるのを目撃するが、時空に支配されている彼は、それがミルトンであるとは気づかない。

Then first I saw him in the Zenith as a falling star,
 Descending perpendicular, swift as the swallow or swift;
 And on my left foot falling on the tarsus, enterd there;
 But from my left foot a black cloud redounding spread over Europe.
 (15:47-50)

But I knew not that it was Milton, for man cannot know
 What passes in his members till periods of Space & Time
 Reveal the secrets of Eternity: for more extensive
 Than any other earthly things, are Mans earthly lineaments.
 (21:8-11)

この合体が合体を呼びおこし、想像力の体現者たるロスがブレイクと一体となると、この経験世界の新たなヴィジョンを獲得し、その「歴史」の世界の一瞬一瞬に輝く「永遠」のヴィジョンをうたいあげる。

For when Los joind with me he took me in his firy whirlwind
 My Vegetated portion was hurried from Lambeths shades
 He set me down in Felphams Vale & prepard a beautiful
 Cottage for me that in three years I might write all these Visions
 To display Natures cruel holiness: the deceits of Natural Religion.
 (36:21-25)

この詩行の背後には否定的なものであったフェルパムにおける「三年間の眠り」(Butts 宛て手紙)の体験を肯定的なものたらしめたいという詩人の苦い願いが込められていよう。こうして第一巻では「自然世界の残酷な

神聖さ」がうたわれ、次の第二巻では無垢の世界の回復がうたわれる。

ミルトンよりはるかに複雑な経路を経て地上にきたオロロンがフェルバムのブレイクの家の庭に現れ、彼にミルトンのことを尋ねると、ブレイクの中に宿っていたミルトンの理性的分身＝セイタンがその姿を顕にする。すると、もう一方のミルトンがその分身を否定すべく地上に降りてきた自れの目的を宣言し、それによって燃えさかる七天使が現れ、天上に残っていた真のミルトンが降りてきて、預言者として Albion すなわち英国に「目覚めよ」と呼びかけて、ブレイク流のアポカリプスが始まる(39:3-13)。しかし、そのヴィジョンはブレイクその人には見えず、オロロンによる語りを聞くだけである(40:6-8)。真のヴィジョンは、直接言葉によって語られることはない。ミルトンはこれに答えて、次のように『ミルトン』全巻の中心的テーマを語る。

All that can be annihilated must be annihilated
 That the Children of Jerusalem may be saved from slavery
 There is a Negation, & there is a Contrary
 The Negation must be destroyd to redeem the Contraries
 The Negation is the Spectre ; the Reasoning Power in Man
 This is a false Body : an Incrustation over my Immortal
 Spirit : a Selfhood, which must be put off & annihilated away
 To cleanse the Face of my Spirit by Self-examination.

(40:30-37)

‘Negation’ とは、人間の理性の力＝セイタンであり、詩人が神のヴィジョンを語るために脱ぎ捨てねばならない偽りの「覆い」である。‘Contraries’ とはブレイクの言う「知の戦い」(1: preface)を押し進める力であって、『ミルトン』では普通の叙事詩における「武器の戦い」の英雄たちに代わってブレイクのカルチャーヒーローたるミルトンの「かつてない行為」(2:21)が描かれている。⁶⁾

2

ここまで述べてきたのは『ミルトン』の主筋のほんの一部であり、実際の『ミルトン』はブレイク神話の四つの世界, Eden, Beulah, Generation, Ulro それぞれのレベルで同時に進行するさまざまな物語が、突然の場面転換によって交互に語られていくという形をとっている。例えば、ミルトンは三つに別れてエデンで眠りにつくと同時にアルロでユリゼンと闘い、同時に地上でブレイクと一体となるといった具合である。語り手についても定まらず、ある時は Bard であり、また別の時には永遠界の住人であり、また分裂、統合を繰り返すゾアたちであり、それらの語りは、しばしば相互に矛盾して物語的な因果性すら破っている。

Rieger や Mitchel は『ミルトン』に四つのまったく異なる語りのレベルを見だし、これらの語りが順次次の語りを準備する手段となっていて、最終的に『ミルトン』における語り、いかえればその言語世界そのものが疑問視されるにいたっており、『ミルトン』はその主人公様に自らを否定する仕掛けになっていると結論する。⁷⁾ これは詩人=預言者の言葉をめぐる矛盾に対処するためのブレイクの工夫でもあろうが、我々は『ミルトン』にもうひとつのブレイクの仕掛けをみることができる。

『ミルトン』において、ブレイクは叙事詩における Invocation の伝統を踏まえているという以上に単なる虚ろな媒体にすぎない自れを提示している。この詩を書くブレイク自身が、詩を創造しヴィジョンを語る主体としてではなく、言葉を受け取り神のヴィジョンにその存在を差し貫かれる受容体として登場している。詩の冒頭で彼はブレイクの詩神であるビューラーの娘たちに

Daughters of Beulah! Muses who inspire the Poets Song
Record the journey of immortal Milton thro yuur Realms
Of terror & mild moony lustre, in soft sexual delusions
Of varied beauty, to delight the wanderer and repose

His burning thirst & freezing hunger ! Come into my hand
 By your mild power ; descending down the Nerves of my right arm
 From out the Portals of my Brain, where by your ministry
 The Eternal Great Humanity Divine. planted his Paradise. (2 : 1-8)

と呼び掛け、それに呼応するかのように詩中の Bard もその歌を終えると永遠界の住人達に 'I am inspired ! I know it is Truth ! for I Sing According to the inspiration of the Poetic Genius' (13 : 51-14 : 3) とこたえ、さらにブレイクは 'I am nothing, and vanity.' (20 : 18) と応じている。このようにここでは詩人は徹頭徹尾、言葉を受け取り、それを書き留めるにすぎない虚ろな器、受け身の存在として描かれ、自ら積極的な行為を起こすことはない。ブレイクがミルトンやロスと合体する場面に明らかのように、彼は外部からやってきたものを受け入れ、それに身をまかせる他なすべはない (22 : 9-14)。こうして先に引用した手紙の言葉通り、「直接口授で予め考えることなく、意志に反してさえも」書く、あるいは書かされる道具としての詩人の姿が浮彫りにされる。

詩の最後では『ミルトン』の全ヴィジョンを一瞬のうちに 'a Pulsation of the Artery' (28 : 47) のうちに得て、トランス状態にあったブレイクが生身の人間、地上の不透明な存在に戻って終る。

Terror struck in the Vale I stood at that immortal sound
 My bones trembled. I fell outstretchd upon the path
 A moment, & my Soul returnd into its mortal state
 To Resurrection & Judgment in the Vegetable Body
 And my sweet Shadow of Delight stood trembling by my side
 Immediately the Lark mounted with a loud trill from Felphams Vale
 And the Wild Thyme from Wimbletons green & impurpled Hills.
 (42 : 24-30)

このようにして「書くのに要した時間は無いものとされ」詩人はミルトンやロスといったさまざまな次元の存在を自由に受け入れることで『ミルト

ン』の言語世界、そのさまざまな語りの織りなす世界を成立させる空虚な媒体となる。

ミルトンはエデンからの降下にあたって大渦 Vortex を通過する。Poe の小説の主人公よろしく、存在を揺るがし世界を一変させてしまう大渦に呑み込まれ、その中心を通過することでミルトンがやってきたのは、ブレイクの神話世界、言葉の渦巻く大海であった。オロロンはミルトンに出会うと彼にむかって 'Is this the Void Outside of Existence, which if entered into / Becomes a Womb?' (41:42-42:1) と尋ねるが、この「存在の外の空虚」こそ彼らの受肉した世界、すなわち『ミルトン』の言語世界に他ならない。大渦を通過するとは 'to see an object from the objects own point of view'⁸⁾ ということ、いうならば主体と客体を逆転させることであり、こうして自己の内と外とをひっくり返した詩人ミルトンの力を得て、『四つのゾア』で自己の神話世界に吸収され、それを統合する力を失っていたブレイクは再びその世界の空虚な中心として再生する。

3

『ミルトン』はブレイクが初期予言書以来『四つのゾア』に至るまで用いていた方法——自己の作品世界を神の位置から展望できる高処に立って理性的に統合しようとする方法、つまり、彼の考えたミルトンの誤れる方法を転倒しようとする試みであったといえよう。ミルトンの誤りとはその方法論であり、彼が否定すべく地上にやってきたセイタンとは、詩の世界に神＝作者として君臨しようとする詩人の理性的部分に他ならない。しかしながら「私は神だ」と宣言することで墮落し、不透明の極限とされたセイタンは

Satan is fall'n from his station & never can be redeem'd
But must be new Created continually moment by moment
And therefore the Class of Satan shall be call'd the Elect.

(11:19-21)

とあるように、有限な詩人が詩作するにあたって、必然的に生み出してしまふ影の部分であり、絶えず否定されるべき存在としてとらえられている。『ミルトン』はそうした物語ることによって生じる影の部分を浄化しようとする物語であり、そのためブレイクは大先輩である詩人ミルトンの自己否定という物語を必要とした。こうしてミルトンは自らの誤りを正すべくブレイクの詩の世界に受肉し、自分の名を冠する『ミルトン』がおなじ誤りに陥ることから救いだすべく自己を否定する。

『ミルトン』はさまざまな意味での転倒——叙事詩の伝統の、ピューリタニズムの倫理の、ミルトンの方法の、主体と客体の、書くものと書かれるものの、内と外の等々を目指したものであると考えられるが、それはヴィジョンを拡散させ、自己を無化することでヴィジョンを統一し、自己を回復しようとした詩人のアイロニーに満ちた試みであった。その相互に矛盾、否定するかに見えるさまざまな語りは結局唯一の指示物、すなわち、ブレイクその人を指している。『ブレイク』と名付けられてもよかったこの詩が『ミルトン』と名付けられたところに、神の言葉の語り手として、再び「歴史」のなかに自己を回復しようとした詩人の、しかし、ミルトンのようにその詩世界の神とはなれない詩人の試みの逆説性がある。あたかも『ミルトン』は詩人ブレイクによって織りなされたテキストではなく、詩人ブレイクこそ『ミルトン』によって、織りなされたテキストであるかのようである。

さて、『ミルトン』における中心的な Image は衣裳のそれである。ミルトンは、エデンを去るにあたって 'the robe of the promise' を脱ぎ捨て (14:13)、『ミルトン』というフィクションすなわち 'the garments of Blake's words' のなかに受肉する。⁹⁾ 地上に降りると、彼は Covering Cherub たる自己の覆い、'an incrustation over my immortal Spirit' (40:35) を否定し (discovery)、オロロンとの出会いの後、Jesus が纏っている「血に浸された衣裳」によって覆われる (recovery)。

One Man Jesus the Saviour. wonderful! round his limbs
 The Clouds of Ololon folded as a Garment dipped in blood
 Written within & without in woven letters: & the Writing
 Is the Divine Revelation in the Litteral expression:
 A Garmēt of War, I heard it namd the Woof of Six Thousand Years.
 (42: 11-15)

ここにある「戦いの衣裳」はもちろんブレイクの『ミルトン』でもあり、詩人は自作の英雄ミルトンのこうした discovery と recovery によって『四つのゾア』以来見失っていた自己を『ミルトン』の無化する詩人としてみいだし (discovery), 神話世界の中から再び歴史のなかに生きる預言者としての自己を回復 (recovery) しようとした。

ブレイクの試みは成功したといえるのであろうか。いずれにしてもブレイクの言葉を読むとは、その多層的に積み重ねられていっては否定される言葉の衣裳に次々と覆われていっては同時にその覆いを脱ぎ捨てていくという両義的な試みであり、読まれたブレイクの言葉はヴィットゲンシュタインの階梯のように、読まれたはしから虚空へと消えていかねばならない。そうして「新しい時の人」である我々が得るのは、ブレイクのさまざまな強度をもってぶつかり合う言葉の群れのもたらす運動の感覚であり、あらたなものとした「歴史」のヴィジョンである。

注

- 1) 引用は *The Complete Poetry and Prose of William Blake*, ed. David V. Erdman (Berkeley: University of California Press, 1982) に拠り、*Milton* からの引用はプレートと行数のみ示す。
- 2) Andrew M. Cooper, "Blake's Escape From Mythology: Selfmastery in *Milton*" in *Studies in Romanticism*, vol. 20, No. 1, Spring 1981 はこの問題を詳細に論じている。
- 3) Harold Bloom, *The Visionary Company* (Ithaca: Cornell University Press, 1971), p. 94.
- 4) *The Four Zoas*, Night IV 53: 24

- 5) S. Foster Damon, *William Blake : His Philosophy and Symbols* (1924 ; rpt. London : Dawsons of Pall Mall, 1969), p. 175.
- 6) 『ミルトン』では叙事詩の徳である「勇気」の新たな意味づけが見られよう。cf. W. J. T. Mitchell, "Blake's Radical Comedy : Dramatic Structure as Meaning in *Milton*" in *Blake's Sublime Allegory*, ed. Stuart Curran and Joseph Anthony Wittreich, Jr. (Madison : University of Wisconsin Press, 1971), p. 304.
- 7) Mitchell, p. 307. James Rieger, "The Hem of Their Garments : The Bard's Song in *Milton*" in *Sublime Allegory*, p. 277.
- 8) Northrop Frye, *Fearful Symmetry* (1947 ; rpt. Princeton : Princeton University Press, 1974), p. 350.
- 9) Harold Bloom, *Blake's Apocalypse* (New York : Doubleday, 1963), p. 358.